

空野文
院の四紀實
院の御金平
帝教房の
宮の飯屋
娘の女あり
をねち机の
わの方はく
教兵が法長
公の所をも
えてうそひ
うりせん
あがれ華り
ことう

白綾の衣は袖を牽引裂。もとふ算て這隊の大將光後の前へ進みどり。
左馬助それとてもとより。遽しく馬より蹴却。身を憤りて觀をもつて遠
刀大を侵す。大臣の脚首を擲するを。今日比功名隨一なり。咱深く慮意
材のあ生ひ足下の功名一齊ふ。遠脚首を匿してなく存するかれば。狂て先
後よ遍与らまよと。裾毛黒ねよ並河魚紀。那ハ副將も不異一言。死首ひも
せよ幸ふト。投する脚首を匿す。他の譽を妬むゆき。自他偕ふ身に血
を淋ぎ。肉残廻て殺りも。唯遠誠を看人たらかう。歎をいふる辯あるにも
せよ。遠誠をもとを匿さんと。最恨りてゆき。と瞼を含んで言發うにてぞ。
先發莞尔とうち笑ひ。並川氏る怨を。其御被る人啼穂立。初
々如く至人先秀。大臣敵よ最深犯恨を屢々積る所も。止こそ我恨を
謀叛を謀企終す合戦の合目に暨び。鬼神と呼ぢれ。大將を斯ので
向ちに尼袴せむを。懷懃全く報ふよ是生ト。然る本今此脚首をもつて日
て踏も做らぬ處ゆび。いある恨むるもせよ。信長公ハこれを恥じ。天皇
是城更よぞうんや。足下先秀に忠義を存する意ゆく。唯遠誠我深く
匿し。先秀ひよ需むるとも。火中に亡一失すと。謂ひを切く日向守が
罪を贖ふ志義比餘慶。これよ起ものあるすと。真儀をりづく従着者
バ焦燥蒐り。全右様つも落済するまで威脅か。遂に先發が御代やく
青首を拂く際して底潛る處て阿弥陀寺の面誉よ人の片へ愧り。これを
葬り。そまうりぬ。餘ふ左馬助が深慮のやど切りしと詠歌しぬ備も大
將先秀ハ大臣の御誠比見えども。魚煙こと漁りかく。秋暮月夜のま